

いじめの防止等のための基本的な方針

平成25年10月11日 文部科学大臣決定（最終改定 平成29年3月14日）

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/04/05/1304156_02_2.pdf

（P4より一部抜粋）

6 いじめの理解

加えて、いじめの加害・被害という二者関係だけでなく、学級や部活動等の所属集団の構造上の問題（例えば無秩序性や閉塞性）、「観衆」としてはやし立てたり面白がったりする存在や、周辺で暗黙の了解を与えている「傍観者」の存在にも注意を払い、集団全体にいじめを許容しない雰囲気が形成されるようにすることが必要である。

（P7より一部抜粋）

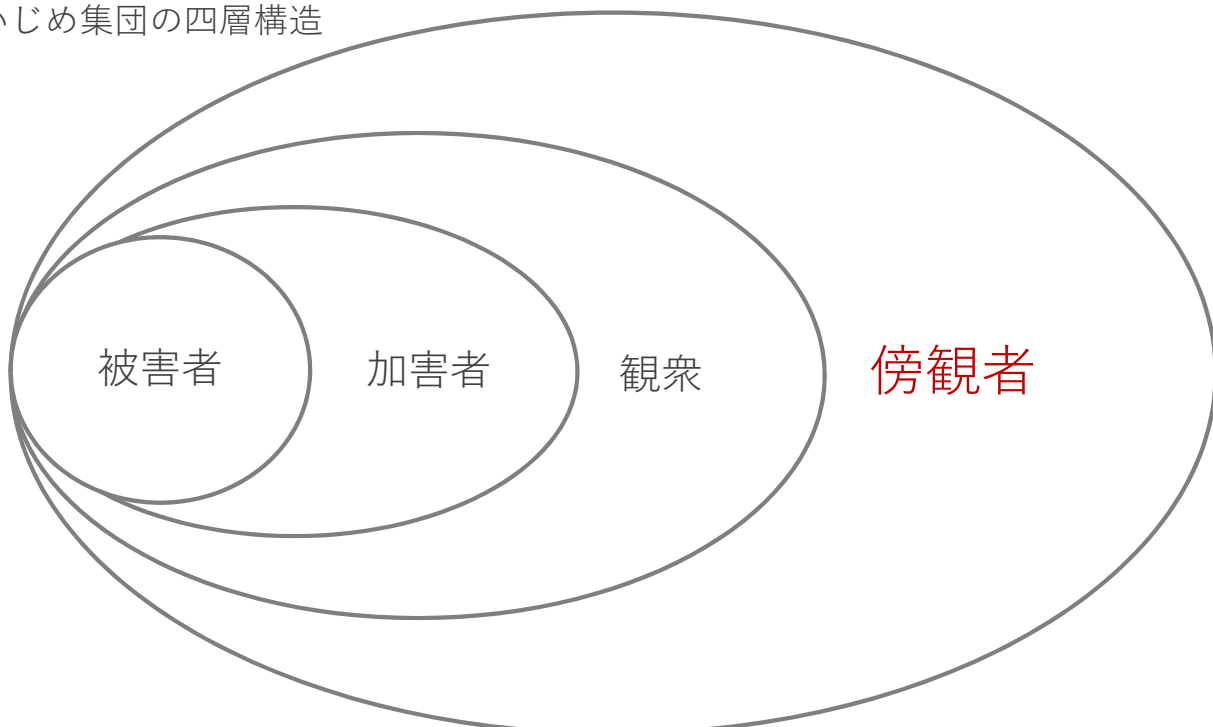
7 いじめの防止等に関する基本的考え方

（2）いじめの早期発見

いじめの早期発見のため、学校や学校の設置者は、定期的なアンケート調査や教育相談の実施、電話相談窓口の周知等により、児童生徒がいじめを訴えやすい体制を整えとともに、地域、家庭と連携して児童生徒を見守ることが必要である。

① 報告・相談窓口をツールではなく教育に活用する

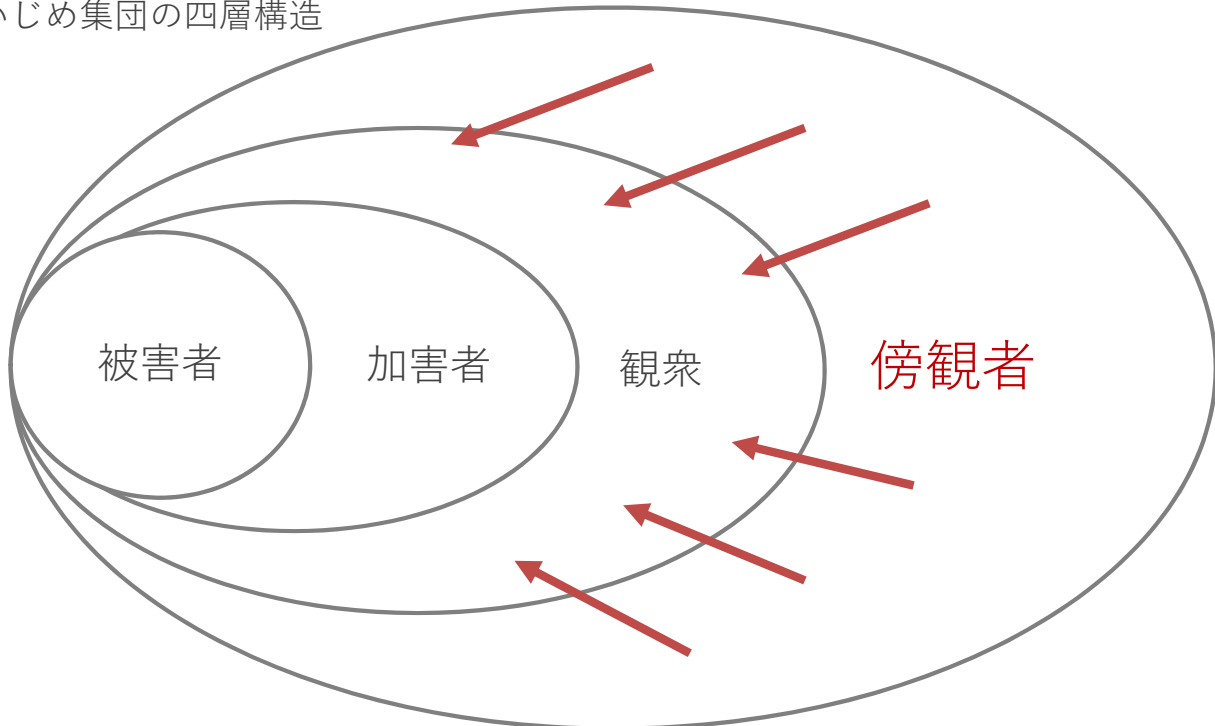
いじめ集団の四層構造



（出典）『新訂版いじめ-教室の病(金子書房)』（森田洋司著・清永賢二著）

① 報告・相談窓口をツールではなく教育に活用する

いじめ集団の四層構造



(出典)『新訂版いじめ-教室の病(金子書房)』(森田洋司著・清永賢二著)

① 報告・相談窓口をツールではなく教育に活用する

問題

対策

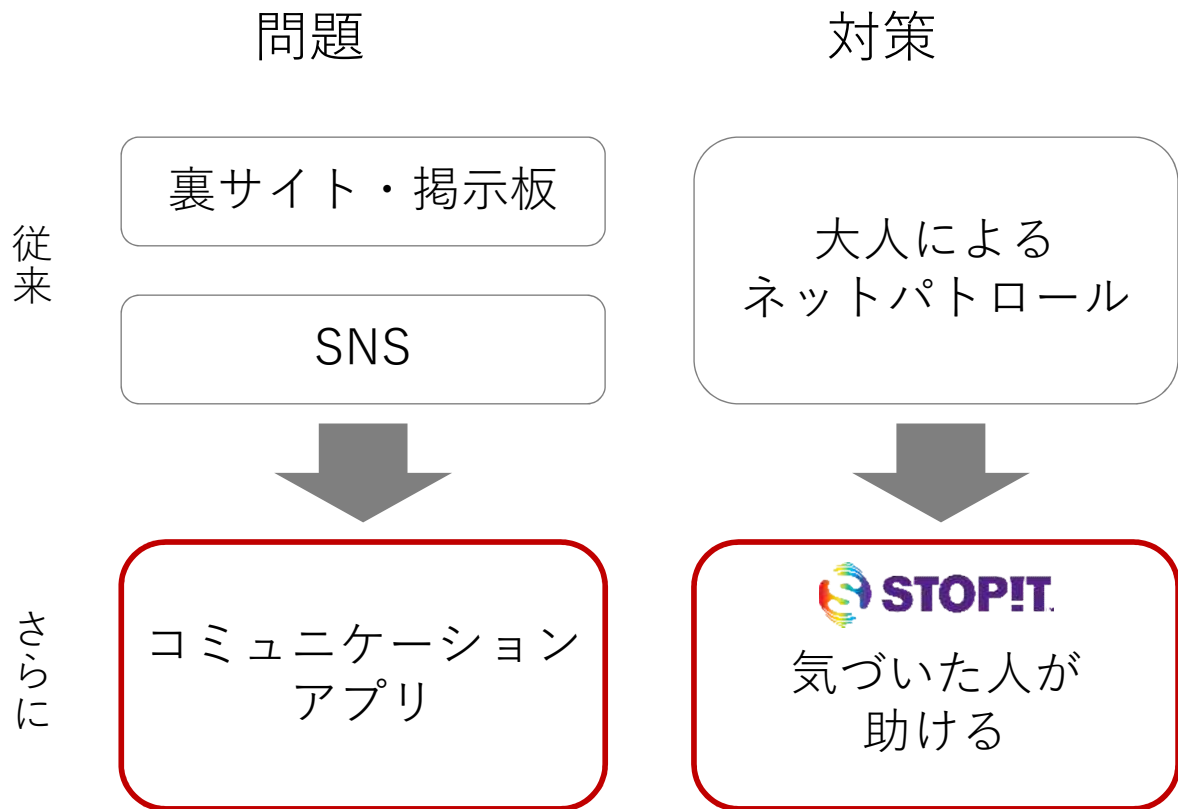
従来

裏サイト・掲示板

SNS

大人による
ネットパトロール

① 報告・相談窓口をツールではなく教育に活用する



① 報告・相談窓口をツールではなく教育に活用する

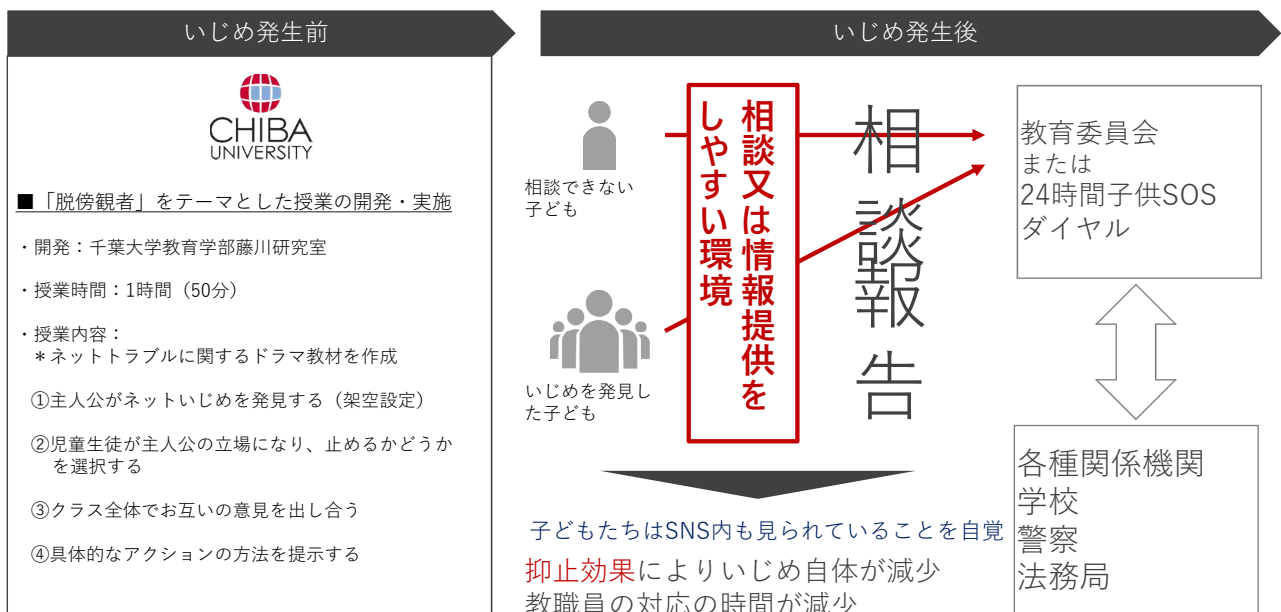
早期発見 + 抑止効果

本日お伝えしたいこと

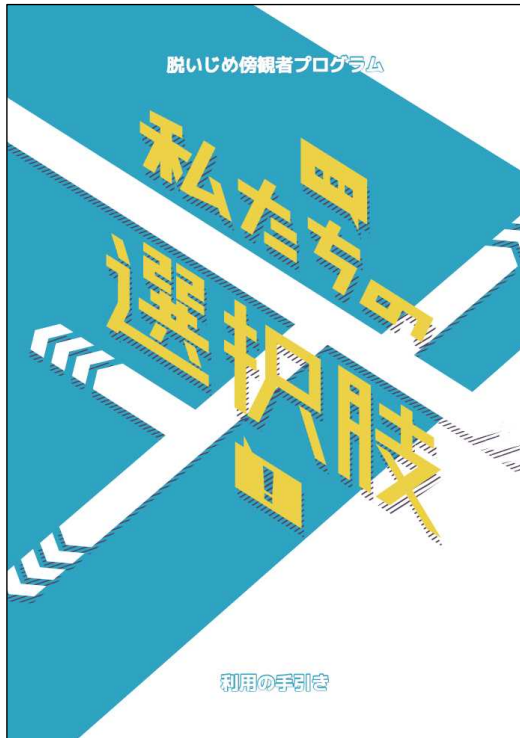
- ① 報告・相談窓口をツールではなく教育に活用する
- ② 専門家の知見を形にし教員の負担を減らす
- ③ 報告・相談の受け手の体制マニュアルを整える

(柏市事例) 授業を行った上での窓口紹介モデル

- ▶ 問題が発生したあとに行動できることをテーマとした情報モラル授業を開発・実施する
- ▶ 相談又は情報提供をしやすい環境をつくるため、すぐに報告・相談できる仕組みを取り入れる
- ▶ 各関係者の連携を活かし、いじめ等問題行動の「防止」及び「早期発見及び解決」を実現する



② 専門家の知見を形にし教員の負担を減らす



脱いじめ傍観者プログラム 「私たちの選択肢」

千葉大学の藤川大祐教授を中心に、敬愛大学の阿部学講師、柏市教育委員会、ストップイットジャパン株式会社が連携をして開発した。7月14日(金)より全国の教育関係者に無償配布予定。

クラスの雰囲気がいじめの発生に関わるという千葉大学、名古屋大学、静岡大学の共同研究成果を元につくられた、子どもたちが「脱・傍観者」の視点に立ち、いじめの予防や解決方法を話し合う授業。道徳の時間や学級活動で活用可能。

② 専門家の知見を形にし教員の負担を減らす

授業プログラムの研究

いじめの傍観者に アプローチする 新たな授業を開発

いじめは、加害者と被害者だけが関わって発生するものではなく、まわりで見ている観衆や傍観者といわれる者たちも関わっています。いじめをしない（加害者にならない）教育や、いじめの被害を受けたときに助けを求める教育は、これまである程度なされてきましたが、観衆や傍観者の立場だった者がいじめを止める行動を起こすようにする教育は、これまであまりなされていませんでした。特にネットいじめに関しては外から見えにくいため、観衆や傍観者だった者がいじめを止める行動をとることは、ますます重要といえます。

私たちの研究は、観衆や傍観者だった者がいじめを止める行動をとれるようにする「脱いじめ傍観者教育」のプログラムを作る研究です。



千葉大学 教育学部教授 藤川大祐
メディアリテラシー、ディベート、環境、数学、アーティストとの連携授業、企業との連携授業等、さまざまな分野の新しい授業づくりに取り組む。学級経営やいじめに関しても研究。月刊『授業づくりネットワーク』編集長（2015年春号より）。

研究目的と方法

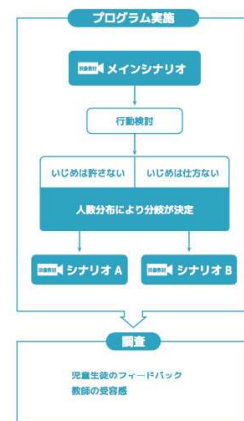
私たちは、小学生、中学生、高校生計919名を対象に、いじめが疑われる2種類の場面（いじめを止める雰囲気がある場面と、ない場面）で、自分だったらどのような行動をとるか、質問紙調査を行いました。そしてこの結果に基づいて、観衆や傍観者の立場の者が、いじめを止める行動をとれるようになることを目的とした授業プログラムを開発することとしました。

研究の成果

質問紙調査の結果、クラスにいじめを止める雰囲気がある場合にはいじめを止める行動をとるとする人が多く、クラスにいじめを止める雰囲気がない場合にはいじめを止める行動をとらないとする人が多いことがわかりました。

この結果を基に、教材「私たちの選択肢」を制作し、この教材を使った授業プログラムを開発しました。教材は、いじめを傍観していた立場の者を主人公とする動画教材とし、主人公の判断は実際の教室の雰囲気にによって決まるようにしました。

2017年3月、千葉県柏市の中学校1年生3クラスでそれぞれ1時間の授業を実施し、この「私たちの選択肢」が私たちが想定した通りの授業プログラムとなっていることを確認しました。



研究体制

代表者：藤川大祐（千葉大学）
質問紙調査等：青山郁子（静岡大学）、五十嵐哲也（名古屋大学）
教材作成・授業分析等：阿部学（敬愛大学）、三戸雅弘（東金市立東金中学校）、柏市教育委員会、古林智美（NPO法人企業教育研究会）、山本恭輔（NPO法人企業教育研究会）他

② 専門家の知見を形にし教員の負担を減らす

モデル指導案

対象 小学校高学年～中学校3年生
時間 45分～50分、1コマ
活用場面 道徳、特別活動、総合的な学習の時間

〈ねらい〉

- 1) いじめの問題を早期に解決するためには、被害者・加害者以外の児童生徒が観察・傍観者の立場にとどまらず、被害者や加害者に声をかけたり、いじめが行われている雰囲気を変えたり、誰かに相談したりといった、なんらかの行動をとることが重要だということを理解する。
- 2) 一人一人がいじめを止める行動をとれるかどうかにはクラスの雰囲気関わっていることを理解し、一人一人の日常の態度がいじめの予防や解決に関係していることを理解する。
- 3) 特にネットいじめにおいては、教師や保護者が直接いじめの状況に気づくことが難しいこと、文字だけのコミュニケーションにおいて雰囲気を変えることが難しいことを踏まえ、工夫していじめを止める行動がとれるようになる。

時間	学習活動	指導上の留意点・使用教材
15分	1. いじめへの対応について考える 動画1 (約11分)、「悪口をやめるよう書き込みをする」か「何も書き込まない」かの選択(で)を視聴する。	導入に時間をかけず、すぐに動画を視聴。 ※録画教材と映像再生機器(PC、DVDプレーヤー、大型テレビ、プロジェクター、スピーカー等) ○個人の考えをワークシートに記入する。 ★ワークシート ② ○どちらの選択肢をとるかを手書きで、人数を板書する。 ○近くの席の者どうし、意見交換をする。
10分	みなさんが光(ヒカリ)さんの立場だったら、選択肢1と選択肢2のどちらを選びますか。 予想される回答 松尾が悪いのだから何もなくてよい、書いても林のように無視されるだけ、自分がいじめの対象となるかもしれない、松尾の態度が悪くていじめられることではいけない、林だけでなく自分が発言することでわかってくれる人が増えるかもしれない、等。(発言内容や話し合っの様子に当該クラスの雰囲気が変わると考えられる。)	○時間と余裕があれば数名に意見を口頭で発表させ(ランダム指名を推奨)、選んだ選択肢ごとに賛点を板書する。 ★抽選アプリ(ランダム指名) ③ (アプリの使用方法はP6-7を参照) ○それぞれの選択肢を選んだ人数の割合がクラスの雰囲気を変えていること、標準によって次の展開が決まることを理解させる。 ★抽選アプリ(選択肢抽選) ④ ○児童生徒のつづきやさを適宜踏いつつ、対話的に進行する。
5分	動画2 (約1分)を視聴する。 抽選方法について確認し、抽選アプリで抽選を行う。	

4

時間	学習活動	指導上の留意点・使用教材
10分	2. 選択の結果を振り返り、考える 抽選の結果に従い、動画3 (選択肢1) もしくは動画4 (選択肢2) を視聴する(動画は各約1分)。視聴後は児童生徒の様子を見て、何か言いたそうな者がいれば発言してもらおう。 もう一方の選択肢も見たいか確認し、意思を確認したうえでもう一方の選択肢も視聴する。(見たいという者が全くいなければ視聴する必要はない。) (少し児童生徒の様子を見てから)ここまでの内容から感じたことや考えたことをワークシートに書いてください。 予想される回答 何もしないと後悔しそう、選択肢1を選んでよかった、こんなにうまくいかないと思う、何を書いたのかわからない、松尾が自分で解決すべきだと思う、度が附けてくれればいい、等。(選択肢1で光を書いたかを動画で検閲していないことについて、何を書いたらいじめが止まるのかを考えてもよい。)	○個人の考えをワークシートに記入する。 ★ワークシート ③ ○時間と余裕があれば近くの席の者どうし、書いたことを紹介させる。 ○時間と余裕があれば数名に意見を口頭で発表させる(ランダム指名を推奨)。余裕があれば、賛点を板書する。
5分	3. 解説を聞く 動画5 (約3分)を視聴する。 (時間があれば)授業の感想を発表する。	○一人一人がいじめを止める行動をとれるかどうかにはクラスの雰囲気関わっていること、一人一人の日常の態度がいじめの予防や解決に関係していることを理解させる。
5分	4. 報告や相談の方法を知る 傍観者から仲継者になる方法として、相談や報告窓口など、行動するための方法を伝える。 (STOPit導入校の場合)匿名報告・相談アプリ「STOPit」の概要と使用方法の説明を行う。	○各都道府県や市町村が設けている相談窓口を紹介する他、直接教員に伝えるなど、子どもたちが工夫していじめを止める行動がとれるための方法を伝える。 ★電話相談窓口が記載された資料 (P14参照) ★STOPit説明書及びSTOPit利用方法動画 ⑤

③ ワークシート、抽選アプリ、STOPit説明書、STOPit利用方法動画は、「私たちの選択肢」専用ページ (<http://www.stopit.jp/workshop>) からダウンロードください。

5

ネットいじめ「脱傍観者」

柏の中学で授業



ネットいじめを見つけた時、どうするべきかを考える生徒たち(柏市立土中学校で)

「見つけたら行動したい」

柏市増尾の市立土中学校で22日、ネットいじめを許さない雰囲気作りを目的とした1年生の授業が公開された。市教委が千葉大(千

葉市稲毛区、敬愛大)と連携して開発したオリジナルの映像教材を使用。市教委が市立中全20校の1年生を対象に、今年度から始めた取り組みで、1学期中に全校で同じ授業を行う方針だ。

「私たちの選択」と題したオリジナル映像教材は、中学1年生のクラス内で、ソーシャル・ネットワーク(SNS) を使ったいじめが起きているというストーリー。生徒たちには自分が「いじめの傍観者」だったと想定してもらい、いじめをやめさせるにはどうすればいいかを議論させる。開発に携わった千葉大教育学部の藤川大祐教授は「『脱傍観者』の視点を持ってもらえるように教材を作った」と話す。

この日の公開授業には1年生22人が参加。映像を見た生徒たちからは「勇気を出して止めなければ、いじめはなくなる」との意見が上がり、講師は「行動を起こす人になることが大事」と訴えた。

「自分も、いじめを見つけた時には行動に出せるようにしたい」と話した。

授業では、市教委がいじめの早期発見につながるため、市立中の全生徒約1万人に利用を呼びかけているスマートフォン用の匿名報告・相談アプリ「STOPit」(ストップイット)の説明も行われ、生徒にアプリのダウンロードを促した。

専門的な知見を 学校現場に活かし 教員の負担を減らす

本日お伝えしたいこと

- ① 報告・相談窓口をツールではなく教育に活用する
- ② 専門家の知見を形にし教員の負担を減らす
- ③ 報告・相談の受け手の体制マニュアルを整える

柏市様との協働で感じた重点

- ・ 20校での授業実施体制
- ・ 教育委員会と学校との連携
- ・ 学校現場での法の理解の徹底

全国のロールモデル事例の マニュアル化

本日お伝えしたいこと

- ① 報告・相談窓口をツールではなく教育に活用する
- ② 専門家の知見を形にし教員の負担を減らす
- ③ 報告・相談の受け手の体制マニュアルを整える

最後に

単なるツールの導入ではなく、
教育を主とした実効性のある取り組みを
実現できるよう引き続き尽力いたします